



第 5 号
平成 26 年 1 月 29 日
岩手県長寿社会課

コミュニティづくりに活かす

「認知症徘徊模擬訓練」(奥州市)の巻

奥州市において、認知症の方に対する支援体制の一環として昨年 11 月に地域住民主体による「認知症徘徊模擬訓練」が実施されました。住民が徘徊模擬訓練実施に向けて取り組むことによりまちづくりやコミュニティづくりにつながっている事例で、認知症対策に取り組む市町村にとって大変参考となるものと思われます。今回は、「認知症徘徊模擬訓練」の一日をレポートします。

新年号発刊にあたって

岩手県保健福祉部長寿社会課総括課長 鈴木 豊

ごあいさつ

長寿社会課総括課長の鈴木です。松もすっかり明けてしまいましたが、改めまして、「本年もよろしくお願い申し上げます。」

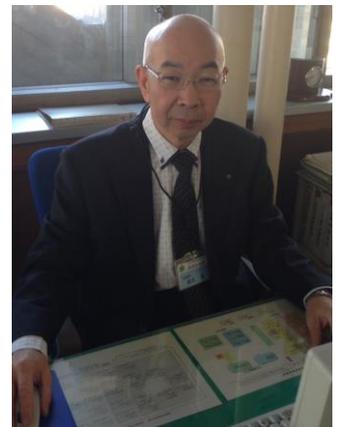
この「ちいきで包む」の発行のいきさつについては、先月までの発行責任者の藤原主査(因みに今月からは岡本主査にバトンタッチ)から説明しているところですが、私からは新年号ということで、「初夢」の視点で地域包括ケアのお話をさせていただきます。

高齢者の“住まい”を基本としたうえで、“医療”、“介護”、“予防”、“生活支援”を切れ目なく提供し、出来るだけ住み慣れた地域での生活が継続できるようにするという「地域包括ケアシステム」の考え方は、平成 20 年頃から提唱されてきたものですが、その背景の一つに今後、急速に高齢化が進行する東京、神奈川、千葉、埼玉など大都市圏で施設立地のための土地確保や保険財政の維持の観点から、施設一辺倒では対応できないことへの対応策とも言われており、緩やかに高齢化が進展する岩手ではあまり関係ない話なのではないか、と指摘する方もいます。

私は、地域包括ケア推進の最も大事な視点は「**可能な限り住み慣れた地域で生活できるよう、高齢者等の尊厳に配慮しながら自立支援すること**」だと考えています。

核家族化、夫婦共稼ぎ、高齢単身世帯の進行が進む現状で、自分の父母等が要介護状態になった場合、自宅や住み慣れた地域での生活支援という選択肢はとても厳しく、多くの方が特別養護老人ホーム等への入所を選択している状況にありますが、果たしてこの選択は、高齢者自身や家族が本当に望んでいることなのか、という疑問が、私が地域包括ケアに力を入れて取り組むことになったきっかけです。

昨年 8 月に示された社会保障制度改革国民会議報告書でも、地域包括ケアシステムの構築は「21 世紀型のコミュニティの再生」と位置付けられています。言うは易し、行うは難しですが、最近読んだ「下町ロケット」で改めて感じているところですが、夢は大きいほど、障壁は高いほど挑戦し甲斐があるものです。これからも、顧客起点と前向き思考で“夢”を追い続けていきたいと考えていますので、よろしくご協力をお願いします。



今回のおはなし

「住民主体の『認知症徘徊模擬訓練』の取組」

奥州市健康福祉部 長寿社会課

奥州市地域包括支援センター 主任社会福祉主事 小野 大祐 氏

(平成 26 年 1 月 15 日に開催された認知症支援情報研修会での発表内容を
を中心にまとめました。)



奥州市の概要

総人口 124,074 人

65 歳以上人口 (高齢化率) 36,767 人 (29.6%)

要支援・要介護者数 (認定率) 6,612 人 (18.1%)

日常生活圏域 5 圏域 (水沢、江刺、前沢、胆沢、衣川)

(以上平成 25 年 3 月 31 日現在)

地域包括支援センター数 1 か所

奥州市地域包括支援センター (6 窓口、11 ブランチ)



徘徊模擬訓練を行った前沢区白山地区について

人口 1,554 人、世帯数 427 戸の農村地帯
平成 21 年夏に自転車に乗り家を出て帰れなくなった人がおり、警察・消防団・地区住民 150 人で捜索。地域外の畑でトマトを食べているところを発見。
平成 22 年秋、夜半に高齢者が行方不明となり、翌日亡くなって発見。
平成 23 年冬、夜半に行方不明となり、警察・消防・在宅介護支援センター・近隣で捜索、地域外の市道沿いの水路で発見 (死亡)。

昨年実施した「[みんなで支える認知症事例検討会](#)」で担当ケアマネジャーと民生委員から提出された徘徊高齢者の事例を、認知症サポート医と地域ケア会議のメンバーで事例検討を行いました。

参加した民生委員から「地域から徘徊しても死亡させない取組をしたい」と意見があり、機会があれば徘徊模擬訓練に取り組むことを申し合わせしました。

県高齢者総合支援センターの土屋ひろみ氏と相談し、福岡県大牟田市保健福祉部長寿社会推進課 社会福祉士・介護支援専門員 梅本政隆氏を招き、直接助言をいただくとともに、土屋氏が[大牟田市の徘徊模擬訓練視察](#)に出向いた際の資料提供を受けるなど御協力をいただきました。

また、白山地区センターに出向き、取組の相談を始めましたが、当初はみんながイメージを持ってずに混乱した様子でした。

効果的だったのは、大牟田市徘徊模擬訓練視察の資料と地域包括支援センター職員による[寸劇](#)だったと、後日地域の方々から伺いました。やはりイメージづくりが大切だと思います。事業実施の前に[認知症サポーター養成講座](#)は必須であり、また送迎バスを地区振興会が準備して実施に至っています。

実行委員会の設立

訓練の目的として次の3点を住民に呼びかけました。

- 事前学習や訓練を通じ、認知症への理解を深めましょう。
- 徘徊する本人の気持ちに配慮した声かけや見守りを学びましょう。
- 徘徊高齢者を隣近所や地域で声かけ、見守り、保護していく仕組みを考え整備しましょう。

また、実施の働きかけまでは地域包括支援センターが先導しましたが、その後は住民を交えた実行委員会を組織し、準備することとしました。

実行委員長には白山地区振興会長、副実行委員長には福祉活動推進協議会長、実行委員に民生児童委員、主任児童委員、行政区長に就任していただき、事務局は地域包括支援センターと地区センターが分担しました。

徘徊模擬訓練実施までの準備

実行委員会の名称は「お互いさま安心ネットワーク」となり、計3回開催しました。

実行委員会の主な検討項目

- 開会・閉会セレモニーの内容
- 伝達訓練の連絡網
- 徘徊高齢者の状況（設定）、徘徊ルート、徘徊高齢者役、サポート役

住民からの要望により検討された項目

- 消防団の参加（実際の徘徊でも対応したため）
- 声かけ役の配置
- 地域住民のスタッフ配置（セレモニー他）
- 届出の配役（住民参加の寸劇を実施）
- 周知方法（ちらしの配付だけでなく、前日に広報車により広報）

なお、徘徊高齢者役は地域包括支援センターから住民ボランティアを募集し、徘徊高齢者をサポートするサポート役は介護事業所に依頼しました。

認知症徘徊模擬訓練（平成25年11月16日：当日）

当日のスケジュール

- 1 開会セレモニー（8：30～9：00）
 - 挨拶、日程確認、声かけ方法レクチャー（講師：福岡県大牟田市 梅本政隆 氏）
- 2 情報伝達訓練
 - (1) 警察署への届出訓練（実演）（9：00～9：30）
 - (2) 白山地区内の情報伝達訓練（9：30～10：00）
 - 担当区域の民生委員から地区センターに通報の実演
 - 地区センターから連絡網を使って徘徊高齢者の情報を伝達
- 3 声かけ訓練（10：00～11：30）
 - 行政区ごとに徘徊高齢者が最低1名徘徊するようにする。
 - 徘徊高齢者の後をサポート役がつき、声をかけていただいた住民にお礼のカード配付
- 4 訓練報告会（11：30～12：30）

開会式（8：30～9：00）

鈴木秀悦実行委員長、奥州市健康福祉部の鈴木良光長寿社会課長から挨拶がありました。

また事務局から訓練概要、日程の説明の後、先進地である福岡県大牟田市の梅本氏から声かけ方法などのレクチャーがありました。

梅本氏からのアドバイス

徘徊高齢者の特徴

- 早朝にふらふら車道を歩いているなどする。
- 身なりが整っていない。
- こちらの質問に戸惑ったり、不自然であったりする。

訓練における留意事項（声かけ方法）

- ゆっくり近づき、視野に入ってから声かけを行う。
- わかりやすく、簡単なことばでやさしく話しかける。
- 声かけがうまくいかなかった場合は、いったん離れ、単独ではなく近所の人など複数で声かけを行う。



鈴木実行委員長

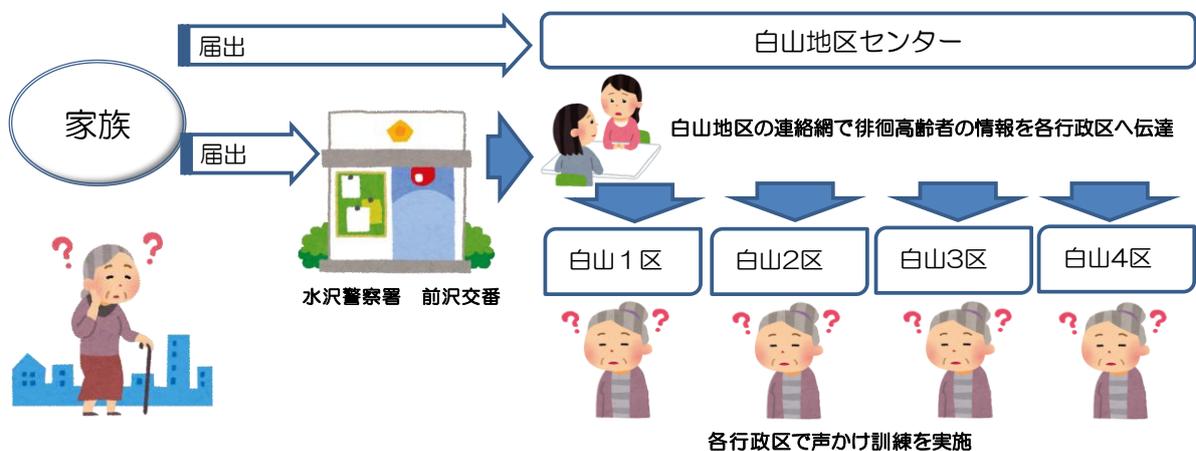


福岡県大牟田市梅本氏

訓練での想定内容

徘徊者：白山ハナ子（仮名）60歳代、中度の認知症、普段着、徘徊歴なし、会話は通常
白山ハナ子さんは息子夫婦と孫と同居している。

ある朝、家族が洗濯をしている間に徘徊が始まり、家族の捜索では発見できなくなったため、家族が白山地区センターに届けるとともに水沢警察署に捜索を依頼。警察では勤務中の警察官への依頼や岩手県警察本部をとおりFネット構成団体に不明時の情報を送り発見協力を依頼。また家族から連絡を受けた地域の区長・民生委員等が白山地区センターに情報提供し、地区内のお互いさま安心ネットワークで情報伝達と本人の発見保護を行う。



警察署への届出の訓練（9：00～9：30）



警察への捜索願の届出を実演訓練で実施しました。水沢警察署のご協力でご協力直接警察官に対応していただくとともに、参加者には実際に警察署で聞き取られる項目を用紙にまとめ配付し、届出に必要な項目もわかるよう工夫がなされました。

訓練の後、警察官の方から「警察では、行方不明者の情報をタクシー会社、バス会社に提供し、協力を得ます。また、**情報は詳しく早期に届出**してください」

とのアドバイスをいただきました。

情報伝達訓練（9：30～10：00）

訓練の概要

- 事前に地域の方々に連絡網を作成依頼。
- 徘徊者の担当民生委員から地区センターに連絡し、地区センターから連絡網によりそれぞれの担当へ連絡。
- 連絡網に参加の人には**記録シート**を配付し、連絡項目に漏れがないよう工夫。
- 市の行政情報システムにも掲載。
- 情報伝達訓練の本部（地区センター）にはココセコム（GPS を活用した位置検索システム）の実演が行われました。（映像記録は訓練報告会でも上映）



訓練の結果

一部消防団のルートで伝達が遅れてしまったものの、ほぼ予定どおり終了。

声かけ訓練（10：00～11：30）

役割分担

4つの行政区でそれぞれ声かけ訓練を行えるよう4人の徘徊役、また徘徊役をサポートするサポート役がそれぞれ配置され、4つのグループで行いました。

訓練の状況

畑仕事の途中で手を休めて声をかけていただいた方、遠くから声をかけていただいた方、中には一緒に付き添ってくれた方もおり、声をかけてくれた方には「**ありがとうカード**」を配付しました。

※ ありがとうカード

徘徊模擬訓練の概要、認知症について知っていただきたいこと、訓練と認知症についての情報提供などを記載したカード。



声かけ訓練チームの皆さん



声かけ訓練の様子

訓練報告会（11：30～12：30）

訓練の後、参加住民の方々に集まっていただき、訓練報告会が開催されました。

主な報告内容、意見は次のとおりです。

（１）情報伝達訓練

消防本部、消防団からの感想としては、消防団の伝達が非常に遅くなってしまい、残念であり、今後の課題としたいとの声がありました。反省点もありましたが、心の温かい人が多い地域で声をかけてくれた点がよかったです。



（２）声かけ訓練

ア 訓練の結果

4つの行政区で計34の方に声をかけていただきました。主に50～60歳代の方が多く、大半の方は白山地区の住民であり、他の居住区の方は少ない状況。



イ 徘徊役住民からの感想

○訓練時になかなか声をかけてもらえなかったため、自分から声をかけたところ逆に驚かれました。自分から声をかける際にも勇気と心の準備が必要と思います。

○声をかけていただき非常にありがたく思い、本当は応えたかったのですが訓練の途中なので抑えました。

○徘徊コースは実際に通ったことのない場所であり、非常に不安でした。

○どこにいる状況かわからず非常に疲れました。実際に徘徊されている方もこのような気持ではないでしょうか。

ウ サポート役（介護事業者）からの感想

○徘徊をする人を見ても、ただ道を歩いているだけの人も結構いました。

○訓練ということで外を出ていた人の中には声かけ方法のわからない方もいました。

○訓練という周知だけでは、住民は声をかけづらいのではないのでしょうか。



エ 声をかけた住民からの感想

○声をかけても止まってくれずにどうしていいかわからずに困りました。

○服装の情報が正しく伝わっておらず、わかりにくかったです。

○発見してもどこに連絡していいかわからないのでそこが課題ではないのでしょうか。

(3) 大牟田市 梅本氏による講評

- 訓練は狭い範囲なので発見は早いですが、実際は雲をつかむ状態で3~4時間後から検索することが多いです。とにかく**詳しい情報をできるだけ早く伝えることが重要**です。
- 情報伝達の遅れ（地区センター→市役所）については、実際にはFAXに切り替え、センターに集合して写真を配るなどの対応が必要です。
- 認知症に声をかけるのは難しいと感じられていましたが、自分だけで対応せずに助けを求めることが重要です。
- 引き止めることができなかった場合、日時、場所、向かった方向などを連絡先に情報提供することが大切であり、連絡先も地区センターなのか警察なのか一本化することも必要です。
- 例えば大牟田市では小中学生もこの訓練に参加しており、今後対象者をどうするかは地域で検討してください。



閉会（鈴木実行委員長）

多くの住民の参加を得ながら今回の訓練を実施することができました。奥州市がこの白山地区を選定していただいたことに感謝します。素晴らしい訓練で、将来、自分も認知症になるかもしれないと思うと感謝したいと思います。

本日は非常に天気良く、訓練に参加した方も気持ち良かったと思われるので「**徘徊の気持ちよき日や冬日和**」という句を送りたいと思います。



地域包括支援センターより・・・徘徊模擬訓練を終えて

1 反省点（今後の検討課題）

- 情報伝達のルートが一部定まっていなかったため、訓練結果から調整し、ルートを提案すべき。
- 声かけ訓練では、地域の人に徘徊役をやっていただいていたほうが。
- 搜索（訓練）もやりたいという意見があり、今後検討を要する。

2 訓練を通じて得られたこと

○地域住民の意識の確認

訓練を通じて地域の状況、取組み、住民の意識が見えてきた。また、地域住民が認知症についてどのように考えているのかを知ることができた。

○訓練を通じて住民が地域での支え合いを見直す契機に

住民の方々が準備段階から訓練本番に至るまで真剣に取り組んでいたのが印象的であった。

○徘徊模擬訓練がまちづくりやコミュニティづくりに

徘徊模擬訓練を実施することで住民意識を高めるのに非常に効果的であったし、地区民のまとまりが出てきたという意見が多かった。続けていくこと、広げていくことが大切であると感じられた。

インタビュー

「認知症徘徊模擬訓練」にご尽力されました鈴木秀悦さん（右：実行委員長、白山地区振興会会長）、千葉始さん（中央：白山地区センター長）、鈴木まゆ子さん（左：地域活動員）の3名に感想などをインタビューしました。



——訓練の対象にこの白山地区が選定された理由は何だと思えますか？

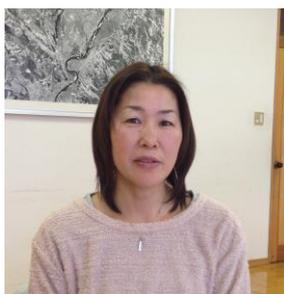
奥州市で実施している「ご近所福祉スタッフ」を白山地区は更に手厚く実施していること、個々の情報を把握し高齢者への対応を細やかに定めた「福祉マップ」に取り組んでいることから**住民が互いに支え合う意識が高い地域**であることが評価されたと思えます。



市には選定していただき感謝しています。（鈴木実行委員長）

——訓練実施に向けて苦勞された点は？

実行委員は全部で60名以上いますが、常に協議に参加していただけの方は15～16名位です。**一番の苦勞は訓練自体が初めてでイメージがつかめない**ということです。どのような連絡体制で地域の方々に周知すべきかなどの点について模索し苦勞しました。



また、認知症といっても人によってとらえ方がまちまちであり、どのように声をかけたらいいのか、また声をかけるときは本当に勇気が必要だということも感じました。

（鈴木地域活動員）

——訓練実施して地域の皆さんに変化は？

認知症について学ぶ良い機会となったと思えます。今まで認知症にはマイナスイメージがあり、家族は隠していましたが、この訓練がお互いのことを考えるきっかけとなりました。みんなで困っている人について考え、安心して徘徊できる地域にすることはまさに「**地域づくり**」であり、その思いが大切だと感じました。（鈴木実行委員長）

担当者は本当に苦勞したと思えます。訓練を実施したことにより地域に「認知症に対する偏見」がなくなり、安心して徘徊できる地域に近づいたと感じます。（千葉センター長）



——今後の取組予定は？

基本的には今年度の訓練の課題が解消できるよう届出訓練、情報伝達訓練、声かけ訓練を充実させるとともに、4月以降、児童の認知症サポーター養成講座への参加も検討しています。（鈴木実行委員長）

——これから訓練を検討している市町村にアドバイスは？

まず「実施してみること。」だと思います。やらないと課題も見えてきませんし、地域でも取組がなされません。（千葉センター長）

取材を終えて・・・・・・・・

今回、奥州市の徘徊模擬訓練の取組を取材させていただきました。

訓練の内容そのものも大変参考となりましたが、白山地区の皆さんなど地域住民が中心となり、関係者の協力を得ながら実施されたということに非常に感銘を受けました。

訓練の準備などを通じて認知症への理解を深め、ともに支え合うという考えに至ったというお話を聞き、これからの地域包括ケアシステムの構築に向けた取組における大きなヒントになるのではないのでしょうか。また白山地区は元々防災や高齢者などを支援する意識が非常に高かった地域という点も大きいと思います。

今回の訓練等を糧とし、これから市全体、他の市町村にも拡大していけばと思いました。

(なんでも取材班「お」)

地域主体の徘徊模擬訓練の取組を認知症支援情報交換会にてお聞きして、徘徊模擬訓練で地域の方が参加し体験することにより、認知症の人のことを、身近に理解できる機会であり、とてもよい周知の場になると感じました。

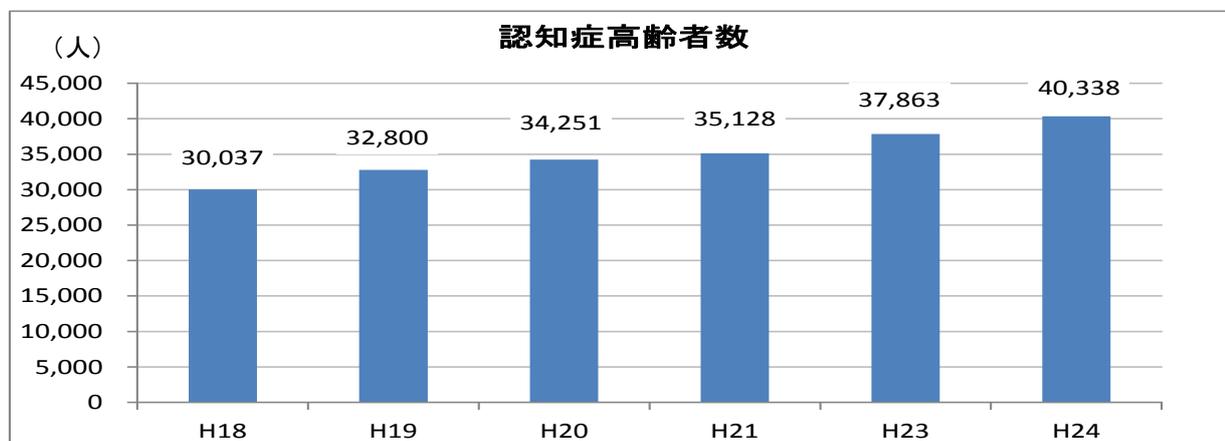
徘徊の行為は、周囲から見れば意味不明の行動ですが、ご本人にとってはその行動のきっかけは目的がある行動であることです。そのことをみんなが共有できれば、さらにやさしいまなざしが注がれるものと思います。

(なんでも取材班「つ」)

[予告]次号では引き続き奥州市の認知症カフェの取組を紹介します。御期待ください。

岩手県の認知症高齢者の状況

平成 24 年度でみると 65 歳以上高齢者の 11.0%であり、要介護（要支援）認定者の 59.0%を占めています。今後、特に 75 歳以上人口の増加に伴い、認知症高齢者の増加が見込まれます。



※1 見守りや支援が必要な認知症高齢者等の数の推移（日常生活自立度Ⅱa以上）

※2 H22 分は震災のため調査せず。

「ちいきで包む」は、岩手県内市町村の地域包括ケアシステム構築をアシストするため、各地の特色ある取組や、関係する情報を発信する情報紙です。

企画・発行（問合せ先）

岩手県保健福祉部長寿社会課（本号担当：岡本・妻田）平成 26 年 1 月 29 日発行

TEL:019-629-5432 FAX:019-629-5439 E-mail:AD0005@pref.iwate.jp